

〈地域調査報告〉

津波被災地を荒らさない仕組み —一名取市閑上の災害跡地見学者の事例から

對馬正一, 工藤沙希, 遠藤祐太

東北学院大学教養学部地域構想学科

I. 目的

東日本大震災によって発生した津波は、宮城県、岩手県、福島県の沿岸部を中心に甚大な被害を与えた。家や田畑、学校などはその被害を受けて跡形もなく流されてしまい、更地になってしまっている場所が多くある。たとえば石巻市では、海辺の近くにある門脇小学校が被害に遭い、火災によって黒焦げになってしまった。更地のようになったその町には多くの観光バスやテレビ局が訪れている。

しかしそのような場所に、その土地に住んでいた人以外の者が視察に来ることがある。津波の被災地に住んでいたほとんどの人々は故郷を離れて避難生活を送っているため、彼らにとって震災はいまだに続いている問題である。被災者とは人的・物的被害を受けた人の事を指し、「復旧（または生活の再建）」と「復興」を目指す人のことを指す。一方で被災者ではない人、震災に直接関係していない人や人的・物的に被害を受けていない人が存在する。この二者の間には「復旧」や「復興」についての考え方に大きな相違がある。この相違については大矢根（2007）が以下のように述べている。

「被災者は生活を再建したい（旧に復したい＝復旧）、もとのような生活（近隣関係を含む）を取り戻したいと思ったところで、決して世間はそれを許さない。世間とは、思いやりや善意を持った被災地外の（全国の）善良な市民みなのことである。災害に強い街を再建すべきとの被災地への温かい眼差しとしての国民的総意は当該議会で承認されて（都市計画決定されて）、事業は粛々と進められる。被災者として、その総論には賛成である。とこ

ろがその各論には、減歩・換地・清算金などを始め、結果的に高騰する地価・家賃という暗い未来が論理必然的に含まれていて、被災者は総論賛成・各論反対のジレンマに陥る。被災者はそうした苦悩を抱えている層があるという事実には疎い善意の眼差しに憤りを感じるのである。」

今後同じような災害があった時に備え、被害者を減らそうということは、誰もが思うことである。しかし、その思惑は元の生活を再建したい被災者と、安全を考える世間とで異なる。被災者が「被災地」と呼ばれる場所から、より安全な仮設住宅や県外等に移動し、仮の暮らしを始める。その段階で、世間にとっては震災が終わっているように見える。しかし、被災者にとっては元の暮らしに戻ってはいないため、震災は終わっていない。つまり、被災者と世間との間で「復旧・復興するまでの時間」に違いが存在しているということが分かる。

今回の調査地である宮城県名取市の閑上地区は、現在、現地再建がされるのか集団移転をするのかがはっきりと決まっていない。そのため、津波で建物が流されてしまった場所は建物が建てられず、草が生い茂っている状態である。その様な状態の閑上に多くの人が視察をしに来ている。私たちはこの事に興味を持ち、調査を開始した。閑上にやって来る人々は何のために訪れるのか、また何を見に来ているのか。聞き取り調査を進める中で、新しく「被災者の中に、更地になってしまった自分たちの土地を他人に見られることを肯定的にとらえる人と否定的にとらえる人がいるのはなぜか」、また「被災者が、被災地を見に来る人を条件付きで受け入れることがあるのは何故か」と

いう問を立てた。この調査報告では、これらの点について、元関上住民への聞き取りを通して明らかにしていきたい。

Ⅱ. 調査地関上地区の概要

1) 位置

関上地区は、名取市の沿岸部に位置し、面積は8.38km²ある。2011年3月11日午後2時46分に起きた東日本大震災は三陸沖を震源とし、国内観測史上最大のマグニチュード9.0を記録とした。関上地区もその大津波により甚大な被害を受けた。

2) 人口推移

大震災が起こる直前の2011年2月末日の関上地区の人口は7,103人であった。2009年10月から2011年2月までの人口推移は、7,174人から7,103人とほぼ横ばいの状態で、ほとんど変化はなかった。

東日本大震災が起きた2011年3月以降、名取市の人口は減少を続けていたが、2011年9月以降人口は増加に転じた。しかし、関上では2011年3月以降減少を続け、2012年7月の人口は、震災直前の2011年2月と比較して、約45%の3,217人にまで減少している。市という大きい範囲で見れば、人口は増加しているものの、関上という地区で見れば減少していることが伺える。(図1)

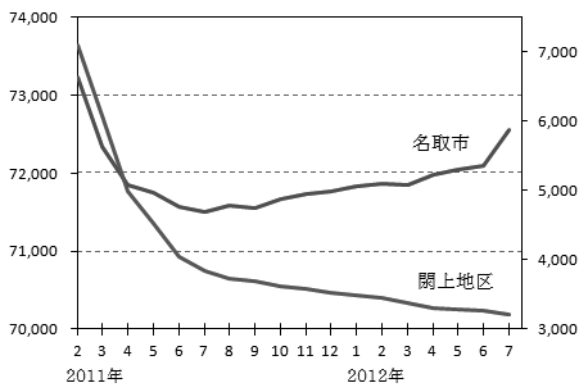


図1 名取市と関上の人口推移 (名取市公式page)

また、関上では14歳以下の人口が11%、15歳～64歳の人口が65%、65歳以上の人口が22%を占めている。宮城県人口をみると、14歳以下が13%、15歳～64歳が65%、65歳以上が22%となっている。関上人口と宮城県人口の年齢割合を比べると、関

上の方が0～14歳と15歳～64歳の割合が少なく、比較的高齢者の多い地域であることが分かる。

3) 震災被害

巨大津波は日本各地の沿岸部を襲い、日本では2012年10月24日までに死者15,872名、行方不明者2,777名が確認された。さらに宮城県では、2013年2月28日までの調べで、死者10,472名、行方不明者1,302名となっている。関上では名取市の死者の約82%にあたる750人もの死者が出た。

表1 名取市の死者数

	男	女	計
関上地区	330	419	749
下増田地区	31	33	64
市内その他	13	8	21
市外	47	25	72
地区不明	3	1	5
計	424	486	911

(名取市東日本大震災の記録page)

この被害状況を丁別にみていくと、川沿いにある二丁目と海側の四丁目、六丁目ですべてに被害が大きい事が分かる。(表2・3)

表2 関上地区の丁別死者数

	男	女	計
一丁目	17	32	49
二丁目	94	116	210
三丁目	18	27	45
四丁目	48	41	89
五丁目	27	37	64
六丁目	72	70	142
七丁目	39	50	89
庚申塚	1	1	2
昭和	1	2	3
新鶴塚	1	1	2
計	318	377	695

(名取市東日本大震災の記録page)

4) 津波浸水域

名取市では海岸から最大5km内陸まで浸水。(図2)河川では8km遡上。名取市の浸水面積は、約27km²で、これは市の面積の28%にあたる。建造物の漂流物の計測によれば、名取市での最大浸水高は9.09mで、この場所は関上漁港付近である。最大浸水高が観測された関上では標高6.3mの日

和山が一番高い場所であるが、日和山で観測された津波はそれを優に超える8.4mであった。



図2 津波浸水域 (名取市公式page)

5) 災害危険区域指定

名取市では、2011年に発生した東日本大震災に伴う災害危険区域の指定に関する条例(図3)が、2012年9月25日に公布・施行された。災害危険区域には、津波による危険の著しい区域が指定され、指定された区域は住居の建築が規制される。ただし、津波に対して耐久上安全な津波避難ビル等の建築物で市長が認めたものは建設が許可される。下増田地区の字広浦(死者4人)、字北原東(死者16人)、字台林(死者1人)、字屋敷(死者27人)と杉ヶ袋字金洗(死者0人)が災害危険区域に指定され、閑上地区(死者750人)は指定されなかった。

閑上地区が甚大な被害を被ったにも関わらず、災害指定区域に指定されなかった理由は、被災者支援に格差を生じさせない為だとしている。名取市は閑上の現地再建の方針を取っており、仙台東部道路西側への災害公営住宅建設等を検討していた。しかし、移転を求める住民の反発を受け、閑上地区を災害指定区域に指定し、事業費の4分の3が国によって補助される、防災集団移転促進事業と併用する事も検討した。防災集団移転促進事業では、自宅建設費用が一部支援されるのに対し、区画整理では、自宅建設費用が支援されない。区画整理される地域の住民にも同様に支援を行う事は、名取市の財源では不可能である為、防災集団移転事業を併用する事を見送った。

しかし、2013年2月12日に行われた日本大震災復興調査特別委員会で、閑上地区被災市街地復興土地区画整理事業が発表された。この事業では、貞山運河東側を産業・スポーツゾーン、西側に住居・交易施設等を配置し、地盤の高上げを行うとしている。



図3 災害危険区域 (名取市公式page)

6) 震災前後の比較

津波の被害を受け、震災以前の街並みが失われ、更地の様になっている閑上(写真1・2)であるが、そのような場所にも関わらず訪れる人がいる。

震災前の閑上で人が集まった観光地は、ゆりあげ港朝市である。ゆりあげ港朝市では、日曜や祝日になると、採れたての野菜や魚が露店に並んだ。また、観光客の他に地元の名取市民が来て、朝食を食べることもあった。ゆりあげ港朝市の他には、ゆりあげビーチや湊神社等の観光地があった。海に近い場所が多かった。(図5)

ところが震災後は、閑上小学校や閑上中学校、日和山等、津波の被害が見て分かる場所に多くの観光客が訪れている。訪れる人は閑上に住んでいた人だけではなく、県外からも観光に訪れる人がいる。このほとんどは海から少し離れた場所であ

る。(図6)

また、下図は震災以前と震災後の観光地の場所の変化を表したものである。



図5 震災前の観光地 (Google mapをもとに作成)



図6 震災後の観光地 (Google mapをもとに作成)

この2つの地図を比較してみると、震災以前と震災後で観光客が見に来る場所が変わっている。震災以前は買い物や遊ぶ為に閑上を訪れていた。しかし、大規模な震災の後、津波の被害があった地域を県内や県外から見学する為に人が訪れている。つまり、震災前後で閑上を訪れる人々の目的が変化している事が分かる。彼らが訪れている場所に注目して、この訪問者達を受け入れているのは、いったい誰なのかを明らかにしていきたい。

Ⅲ. 観光客とそこに住んでいた人々

1) 5つの場所

東日本大震災以前の閑上の観光スポットには「ゆりあげビーチ」、「富主姫神社」(とみぬしひめじんじゃ)、「ゆりあげ港朝市」があった。これらは主に名取市民が利用し、海岸の近くにあった。しかし、それらは震災の被害を受けて流されてし

まった。

震災後は主に閑上小学校、閑上中学校、日和山、震災の資料館の役割を果たすプレファブ施設「閑上の記憶」の4つの施設や場所が人を集めている。

閑上小学校と閑上中学校は津波の被害を受けて、現在は使われていない。校舎内は立ち入り禁止であるが、漂流物が置かれた閑上小学校の体育館と、閑上中学校前に置かれた慰霊碑には、一般の人でも入っていくことができる。

日和山は、標高6.3mの小高い丘で(写真3)、震災前は神社があり、閑上の土地全体が見わたせる場所であった(写真4)。

「閑上の記憶」は、津波に襲われている閑上の写真、震災以前の写真、子どもたちの震災体験を形にしたオブジェなどが展示されており、毎月何回か地元の被災者に語り部として被災した時の様子を語ってもらう企画が行われている。

震災の被害がある場所や震災の資料がある場所に人が集まっており、小学校・中学校といった公共施設など普段観光スポットになりえない場所が人を集めている。「被災地である閑上」に人が集まっているのである。

このほか、閑上の人々が自主的に避難していたり、仮設住宅に避難していたりと、コミュニティがバラバラになった閑上の人々をサポートしている「閑上まちカフェ」がある。この施設は、地区公民館を利用してできた民間施設で、地元の人の語り場と交流の場としての役割を持つ。ここには閑上に住んでいた多くの人々が集まっている。

以上をふまえて、「閑上小学校」、「閑上中学校」、「日和山」、「閑上の記憶」、「閑上まちカフェ」の5つの場所で主な聞き取り調査を行った。調査を行う中で、「被災地の人が、見に来る人を受け入れる条件」を探る手掛かりを得る事が出来た。

2) A氏の語り(2012年10月22日)

地元の人々が集まっているという「閑上まちカフェ」に向かうと、そこでは、閑上に住んでいた人を含めたパソコン教室が行われていた。そこで、パソコンを習っていた主婦の方に話を聞くことができた。

観光ツアーを見ることに初めのころはあまり良い気持ちはしなかったという。バスガイドが観光客を閑上中学校や日和山に案内し、説明をする。しかし、案内しているバスガイドは地元の人ではないこともあり、どのような話をしているのか分からない。また、案内されている人々についても何をしに来ているのか分からない。日和山から流されてしまった閑上を見ている彼らに対して、「見世物ではないのに」といつも思っていた。

しかし、広島や東京の自分の知り合いが会議や支援のために閑上に来る際、大型バスに乗ってくるのを見て、見方が変わったという。震災後は閑上に来る手段が少なく、大勢が来るには大型バスをレンタルしてこちらに来るなど限られた手段しかなかった。時には観光バスを借りてくることもあり、観光バスに乗ってくる人々が全て観光というわけではなく、色々な人々が来るのだと思ったという。そのうえで、ただ目的もなく閑上を見に来る人は来ないでほしい。学びに来ているわけではない人は来ないでほしい。それは、千人近くの人々が亡くなったことを無駄にしたくないからだという。

3) B氏の語り (2012年10月7日)

日和山に向かう途中、何もなくなってしまったところに花々があり、周囲の風景とは異なった光景が目に入ってきた。そこにはお茶を酌み交わして数人の人が集まっていた。そして、その中の一人は生まれてからずっと閑上に居住しており、弟を含めた家族、親戚5名を亡くしていた。B氏は、津波で何も残っていない道のわきに花壇(写真5)を作り、花を植えていたことについて話してくれた。

東日本大震災後に、実家(花壇のある場所)に帰ってみるとダンプカーが停まっておき、「そこには人が住んでいたのに、土足で上がられた気分がした」と話した。そこで、小さなせめてもの抵抗として実家の場所に花壇を作り、花を植え始めた。その結果、ダンプカーや車両が停まる事はなくなった。また、他にも花壇を作り、花を植え始めた理由があった。それは亡くなってしまった人

(弟達)が家の場所が分かるようにするという事である。B氏は、「何もないからどこだか分からなくなるといけない」と述べていた。そして、彼女たちは故人がそこに帰ってきたと信じ、花の手入れをしながら故人と「コスモスを植えた」、「チューリップが咲いた」等と話しをする。

また、このような活動をしていると、すぐ近くにある日和山に訪れる人々に声をかけられる事がかなりあったと話していた。閑上に住んでいる人ではなく、「ここに本当に人が住んでいたのか。」「本当にこの場所に町があったのか。」と尋ねられる事があった。このような言葉を聞くと悲しい気持ちになるという。それは、「ここには確かに人が住んでいたのに」「私たちの生活が確かにここあったのに」という思いがあり、閑上を知らなかった人々には廃墟にしか見えない光景が閑上として伝わる事が辛いからだとしていた。

そんなB氏は、閑上を見に来てほしいと話す。その理由は、東日本大震災で多くの人々が亡くなった被災地だからこそ、よくその惨状を見て何かを感じ取り、訪れた人の住む地域で活かしてほしいからだ。また、自分たちが生きてきた証を残したい、知ってもらいたいという理由もあるという。

A氏とB氏は、被災地を見に人が来る事に賛成の立場であり、積極的に被災地を訪れてほしいと語った。しかし、A氏、B氏とは対照的に、被災地を見に人が訪れる事に反対の立場のC氏に話を聞く事が出来た。

4) C氏の語り (2012年10月31日)

「閑上まちカフェ」で創作活動を行っていた女性C氏に話を聞くことができた。

この場所を見られるということが本当に嫌だと語ってくれた。それは彼らが「瓦礫」と呼んで見に来ている物は、閑上の人々にとって家であり、または、よく通っていた店であったからだ。仕方ないと思うが、「瓦礫」と呼ばれることにも、「瓦礫」を見ている人を見ることにも嫌な気持ちがあるという。震災の時、C氏は小学生の息子を閑上小学校まで迎えに行った。しかし、息子は小学校では見つからず、「一人で帰っているのを見た」

という話を聞いたので通学路を自転車で走って探すが、見つからない。途中川が波打っているのを見たが、息子が心配のあまり津波がくるということに気が回らなかった。「もしかしたら」という期待のもとに、もう一度小学校に戻ったところ、小学生の息子はそこで見つかった。その後、すぐに津波が凄い音を立てて閑上を襲った。「親だから当然のことをした」とC氏はその時のことを涙ながらに話してくれた。

この時の経験は今の閑上を見ても理解されない。水がまだここに入っていて、その現場を見ることができれば閑上を訪問しても良いという。

A氏、B氏は被災地に観光客が来る事を受け入れる立場、C氏は被災地に観光客が来る事に反対の立場を取っている。しかしここでA氏、B氏、C氏への聞き取りの中でそれぞれ語られた「学び」、「感じ取る」、「経験」という言葉に注目したい。

観光客が閑上を訪れて、学ぶ、感じ取る、経験する、という行為は、観光客が閑上を見る事で、「何か」を持って帰るという点が共通している。学ぶであれば、観光客が閑上を見る事で「何か」を学び、その何かを自分の暮らす場所へ持って帰るという事であり、感じ取るであれば、閑上を見て感じた「何か」を持って帰るという事である。経験するであれば、閑上に訪れる事で、閑上の以前の暮らしや津波に襲われる瞬間など、「何か」の経験を得て持って帰るという事である。

つまり、A氏、B氏、C氏にはそれぞれ、観光客に持って帰ってもらいたい「何か」が存在している。観光客が閑上を訪れる事に賛成する人と反対する人を分ける基準は、持って帰って欲しい「何か」を、観光客が閑上を訪れる事で持って帰る事が出来るか思っているか思っていないかにある。閑上を訪れる事で「何か」持って帰ってもらう事が出来るか思っている人は、観光客が訪れる事に賛成し、持って帰ってもらう事が出来ないか思っている人は観光客が訪れる事に異和感を示している。つまり、被災地の人々が、見に来る人を受け入れる条件は、「何かを持って帰る事」ではないだ

ろうか。

そこで、次章からはこの「何か」とはなになのかを明らかにしていく。

IV. 閑上の見え方

1) 被災していない人から見た閑上

被災していない人々の目から見て、閑上はどう映るのか。現在は宮城県仙台市に住んでいるが、震災前は閑上に住んでいた男性が、日和山に視察に来ていた。かつては閑上でバスの運転手をしてきた。自分が運転してきたバスの運行通路を眺めていたが、そこにはいつも見えていた島が見えない。大きな閑上大橋や中学校は残っているから、その近隣の様子は分かるが、その他の家がないから、詳しい場所が思いだせない。毎日のように通っていた道が、良く知っていた道のはずなのに、どこに来たのか分からない、と述べていた。

お盆の前にも多くの人々が閑上を訪れていたが、仕事の休みをとって東京から二人の女性が来ていた。東京も直下型地震が来ると騒がれている。津波も来るかもしれない。その時のために学びに来た。流されてしまった甚大な被害をこの目で見ておきたいという閑上小学校の前には、子どもを連れた夫婦がいた。子どもに対して、ここには色々な人が住んでいた、しかしその生活が津波によって壊されてしまったことを教えたいと語っていた。

2) 閑上のコミュニティ

閑上地区には義務教育機関が閑上小学校と閑上中学校の二校ずつしかない。引っ越し以外では小学校に入学してから、中学校を卒業するまで一校の学校となる。美田園第一応急仮設住宅では主に名取市閑上5丁目、6丁目の人々がまとまって住んでいる。敷地内にベンチや集会所などが設置されており、仮設住宅に住む人々がひきこもりにならないよう、他の住民と接する工夫が施されている。集会所ではカラオケ大会などのイベントも行われるほか、住民なら自由に使うことができる開放的なスペースとなっている。

一方、仮設住宅に入っていない人々の中には、

仮設住宅に入ることのできなかつた人々がいる。マンションやアパート、親族の家や閑上から離れた場所の空き家などに現在は住んでいる。周りに知っている者が少なく、閑上に住んでいた頃の知人や友人も仮設住宅に住んでいるため話し相手が少ない。仮設住宅に遊びに行っても、元のコミュニティに戻れない。既に仮設住宅内でのコミュニティが形成されており、仮設住宅に入ることのできなかつた人々は新しいコミュニティに入っていくことが憚られるようだ。

そのようにコミュニティが半ば壊れてしまったことは、コミュニティ外の人には分かることができなない。町並みがあったことも、町に住んでいなかった人には分からない。ここでも閑上で被災した人々は閑上以外から来た人々に対して、「何か」を持ちかえって欲しいという思いが共通している。

閑上の人々が持ち帰って欲しい「何か」を明らかにするために、震災前は運送業を営んでいたというD氏の語りを参考にしたい。

3) D氏の語り (2013年1月8日)

D氏は震災のあと白内障にかかり、手術を受けたが失敗し、片目が見えなくなった。そして、仕事の運送業を辞職せざるを得なくなり、無職になってしまった。そこで、体を動かすために閑上の自らの畑を耕していた。

彼は県外から人々が来るのを恥ずかしいと述べていた。それは、今の閑上は何も変わっていないからだ。震災が起きてからの閑上は片付けるのが早かった。しかし、その後の動きがどこの地域よりも遅いのだという。集合住宅ができるという話が上がっても、なかなかそれが実現しない。クレーン車が止まっているのを見ても、そのクレーン車が動いているところを見たことがないなど、行政の復興への足取りが重いことを話していた。そのことから、彼は何も変わらない閑上のことを恥ずかしいと思ったのだという。

彼が見てほしいのは、町並みが戻った閑上で、売店も宿泊所も見るところの何か一つでもできた閑上である。

4) 考察

A氏、B氏、C氏の語りから、閑上の人々には閑上の外から来る人々に持ち帰って欲しい何かがある事がうかびあがってくる。閑上の人々が持ち帰って欲しい何かとは、何も無くなってしまった閑上ではなく、建物が立ち並ぶ閑上、人が暮らす閑上、被災の際に大変な様相を呈した閑上を見てほしい、知ってほしいと考えている事である。

閑上に暮らしていた人々にとって、今の閑上はかつて暮らしていた光景や、コミュニティが無くなってしまっている状態である。反対に、閑上以外の人々から見れば、今の閑上は更地に等しく、何も無い。つまり、閑上の人々から見える閑上は、かつての暮らしが欠けている状態であるが、その他の人々から見れば、何も無い土地のようなものである。被災地を見に来た人にとって、確かに町があったという事実は頭にあるものの、それがどのようなものであるのかまでは分からない。その点で、閑上に暮らしていた人々と、閑上を見に来た人々に見えるものの間には大きな差がある。閑上の人々は、閑上を見る事でこの差を埋めてから帰って欲しいのではないか。被災地の人が見に来る人を受け入れる条件である「持ち帰ってほしい」「何か」とは、震災前の閑上にあった、人が暮らす光景やコミュニティといった、「震災によって見えなくなってしまったもの」に他ならない。

V. 何故見に来る人を受け入れるのか； オモテの理由とウラの理由

1) オモテの理由

閑上の人々は、外から来る人々に、震災によって見えなくなったものを持ち帰って欲しいと感じている事が分かった。では、閑上の人々は、そもそもなぜ訪れた人々に震災前の町の様子を持ち帰ってもらいたいと考えているのだろうか。

閑上での聞き取り調査の中で、多くの人が被災地を見る事で役立てて欲しい、学んで欲しいと述べていた。今回の地震によって発生した津波の被害を知る事で、今後、震災が起きた時に同じよう

な被害が無いように、犠牲者や被災者を減らして欲しいという意図が分かる。つまり、津波の被害を受ける前と後の閑上を比較して見てもらう事で、津波の恐ろしさを実感し、それぞれの土地で防災に役立ててもらふ事を目的としているのである。

つまり被災者が被災地を見に来る人を受け入れる条件としてあげられるのが、学習や防災に役立てるという条件である。これらは、被災者が被災者以外の人に向けて、発信する理由であることから、「オモテ」の理由としておく。

2) ウラの理由

「オモテの理由」では、被災者である自分達の経験や、被災地である閑上をいわば今後のために利用してもらふ事で被災地の見学者を受けいれているといえる。しかし、閑上の人々は、防災の役に立ててもらふ為だけに、ただ利用される立場を取り、見に来る人を受け入れるのだろうか。そこには別の論理が存在しているように思える。この直接は語られる事のなかった論理を「ウラの理由」としたい。それは以下の2つに分けられる。

① 閑上を監視する目

閑上の人々が被災地を見に来る人を受け入れる理由は、閑上が更地から荒地へと変わることを防ぎたいことにも関わっている。「閑上を見に来ている」人が来るという事は、同時に見学者が閑上を監視する目になってくれるという事である。閑上を監視する目がうまれる事で、無法地帯になり閑上が荒れていくのを防ぐ事ができる。もし、全くそのような人が来なくなれば監視の目が無くなり、更地は無法地帯になり荒れはてしてしまう。閑上の人々は、人が来なくなる事で、閑上が荒れていく事を防ごうとしているのである。

② 閑上への働きかけ

震災被害を受ける前は、監視の目など作る必要が無かったのに、震災後の今はなぜ、閑上の人々は外の人を呼び込まなくてはいけないのか。それは、今の閑上では、土地に対する働きかけを行う必要があるからである。B氏の行動にこの事は顕著である。震災後にB氏が、実家があった所へ行

くとダンプカーが停まっていた。そのことを不快に感じたB氏は、実家があった場所に花壇を作り、車両が停まるのを阻止している。震災以前であれば、人の土地に勝手に車両が停められるという事は起こらなかった。しかし、津波によって敷居や建物等が流される事で、人の土地の境界線は曖昧になってしまっていた。その結果、普段は起こりえない他人の土地に無断駐車が行われるようになる。つまり震災後は、私有地に対して、所有者が土地の管理や所有を主張する働きかけを行う必要が出てきたのである。B氏の行動は、実家があった土地に対して花壇を作るという働きかけを行い、いわばその土地の管理をB氏が行っている事を主張する事で、他の人がその土地に対して働きかけるのを止めさせようとしている事を表している。

実際に更地になった閑上には不法投棄が増えつつあった。つまり、閑上の人々が閑上を訪れなくなる事で、それぞれが持つ私有地への力が弱まり、放棄された土地だと認識されてしまう。閑上の土地が放棄された土地、所有者がいない空白地帯と認識される事で結果的に不法投棄を招き、閑上にかつて町があった光景からさらにかけ離れてしまう。それを防ぐためには、閑上に人を呼び込む必要がある。また、呼び込む人の対象は、閑上住民だけに限られず、閑上の外から来る人々も含まれる。

まず、閑上住民を呼び込む取り組みとして、ゆりあげまちカフェがある。閑上住民を呼び込む理由は、閑上の人々がそれぞれの私有地に対して働きかけを行い、私有地への権利を主張する事で、他の人が閑上の土地に勝手に働きかけるのを防ぐ必要があるからである。ゆりあげまちカフェは、誰でも利用できるカフェであり、ここは、閑上住民の休憩所や会議所として利用されている。また、住民同士が談話をする事もできる。

一方で閑上の外から来る人々を呼び込む取り組みには、閑上の記憶がある。こちらには閑上住民は震災のことを思い出してしまうため、なかなか足を運ばないようであるが、閑上の外から来る

人々にとって、震災被害の資料展示や、語り部の語りを聞いて、震災被害について詳しく知る事が出来るようになっており、閑上の外から来る人々が足を運ぶきっかけを作っている。

このことから、閑上の人々は、閑上住民を呼び込む事で、閑上の土地への勝手な働きかけを防ぎ、閑上の外から来る人々を適切に呼び込む事で、閑上の土地に働きかけようとする人々への監視の役割を担わせているのである。

3) E氏の語り (2013年1月8日) : 「ウラの理由」

このウラの理由の存在を表している語りに、閑上まちカフェに娘と来ていたE氏の語りがある。

E氏は県外から視察に来る人に対して、最初は「ここは観光地ではない」という意味で気になることはあった。しかし最近になって、来てくれることそれ自体が閑上を気にかけてくれていると考え、そのことが嬉しいと述べていた。流されてしまった建物等の片づけだけが早く終わってしまった閑上はその後、大きな動きを見せることがない。地元に住んでいた人々でさえ、そのためかあまり足を運ばなくなってしまった。閑上の人々は震災のことは「ずっと忘れられなくて引きずっている」状態である。しかし、同じ名取市でも閑上から少し離れると震災はとっくに終わっているように思える。このまま全く人が来なくなってしまうと、この閑上は忘れ去られてしまうのではないか。また、最近になって増えて来た名取市外からの不法投棄などの心ない動きが増えてしまうのではないかという思いもある。

VII. 結論

閑上の人々は、閑上を訪れる人々を条件付きで受け入れている。その条件とは、震災によって見えなくなってしまった「かつての町の様子を持ち帰ってもらう事」であった。閑上の人々が、この条件を提示する理由の1つに、かつての閑上を知ってもらう事で、津波の恐ろしさを知り、防災に役立ててもらおうという事がある。本稿ではこれをオモテの理由とした。しかし、その理由とは別に、かつての海から閑上の町がかけ離れてしまう事を

防ぐというもう一つの目的もある。これをウラの理由とした。

つまり人をうけいれる事で閑上が無駄地帯となり荒れる事を防ごうとしているということである。それは、閑上が荒れる事で、震災前の閑上とかけ離れていく事を恐れ、少しでも閑上の姿を保とうとしているからではないだろうか。現在、閑上は再建の方針が決まっていない。そのような中で、閑上がかつての姿とかけ離れて行ってしまふ事は、閑上の現地再建を遠いものにしてしまい、元の土地に住めなくなってしまう可能性を高めることにもなる。つまり、閑上の人々は、かつての町の様子を知ってもらう事で、閑上が荒れるのを防ぎ、以前暮らしていた土地をとり戻す可能性を少しでも維持しようとしているのではないか。閑上に人を呼び込むための取り組みとして、ゆりあげまちカフェや閑上の記憶がある。閑上の人々は、閑上に人を呼び込む事で閑上が荒れるのを防ごうとしている。閑上住民には閑上の土地への働きかけを促し、外から来た人々には閑上の土地への働きかけを監視する目になってもらっている。

つまり、閑上住民は、被害を知ってもらい防災に役立ててもらおうという被災経験を利用してもらうという理由の他に、外の人達に監視をしてもらうという、外の人達をいわば利用する目的も持っている。閑上の人々は、これらの理由から時に条件付きで見に来る人を受け入れているといえるだろう。

謝辞

本調査の過程では、本論で記した方以外にも多数の閑上地区の方々にお世話になった。突然の訪問で、不慣れた質問にもかかわらず、ご協力いただいた方々に対して、記して感謝申し上げます。閑上地区の1日も早い復興を、グループ一同、お祈り申し上げます。

引用文献, web site

大矢根 淳 (2007)「第三節 生活再建と復興」,大矢根ほか編,『シリーズ災害と社会学①災害社会学入門』弘文堂

名取市, 地区別人口ページ (<http://www.city.natori.miyagi.jp/soshiki/soumu/shisei/toukei/tikubetsu>)
(2012/12/22閲覧)

毎日新聞2012年9月21日記事 (<http://mainichi.jp/area/miyagi/news/20120921ddlk04040002000c.html>)

毎日新聞2012年10月11日記事 (<http://mainichi.jp/area/miyagi/news/20121011ddlk04040005000c.html>)



写真3 多くの人が集まっている日和山
県外から来た人々も多い。(2012年8月14日撮影)



写真1 震災前の閑上(2007年)

建物が多く建ち並んでいる。

(名取市「東日本大震災の記録」ページより。

<http://www.city.natori.miyagi.jp/soshiki/soumu/311kiroku/index/gazou/hikaku>)



写真4 日和山から見た閑上
(2012年8月14日撮影)



写真2 震災後の閑上(2011年4月)

建物がほとんど流されて更地状態になってしまった。(同上)



写真5 B氏が作った花壇
(2012年10月7日撮影)